

マイコレクション

My Collection

Yoko Mori

森 瑤子



マイ コレクション

My Collection

Yoko Mori

森 瑤子



マイ コレクション

森 瑤子



1991年3月29日 初版発行

発行者／角川春樹

発行所／株式会社角川書店

東京都千代田区富士見2-13-3 〒102 振替東京3-195208

TEL 営業03-3817-8521 編集03-3817-8451

印刷所／暁印刷株式会社

製本所／株式会社鈴木製本所

落丁・乱丁本はお取替えいたします

ISBN4-04-872629-3 C0093

マイコレクション

目次

1. 食卓素描

皿に描いたラブレター	8
秋風に乾杯	12
ジェイムス・マーチン	16
ロマネ・コンティ	20
男の時間	24
一人で乾杯	28
サンタさんの食べ残し	32
こたつの上の料亭	36
ひそかなる贅沢	40
恋のかけひき	44
ある会話	48
朝のいさかい	54

2. 浪漫回廊

エレベーター	60
エトランジェ	64
鉢合わせ	68
I LOVE ME	72
ライヴァル	76
商品券	80
特選ブティック	84
美術画廊	88
アンモナイト	92
意外な発展	96
ショーウインドー	100

3. 百貨揀乱

ヒッコリーのパター	104
ガラスのニューヨーク	108
月の光の降る夜	112
孤高の人	116
あの時ベニスで	120
第三幕目	124
恋の終わり	128
コレクトコール	134
彼女の勇氣	138
結婚披露宴	144
MY COLLECTION	149

イラスト 橋本シャーン
装幀 菊池千賀子

1.

食卓素描

皿に描いたラヴレター

「新聞で垣根を作るの、いいかげん止めて欲しいわ」と、妻が言った。

その朝、彼女は必要以上にガタピシと物音をたて、溜息ためいきを二つばかりついたりした。不満がのどまで出かかっている証拠だ。新聞の垣根うんぬん云々

は、ボクシングで言えばほんのジャブに過ぎない。

「今夜のお食事、どうなさるの？」

「食べるよ」

「どこで？」

「うちでさ」

妻は片方の眉まゆを高々と上げる。

「何か忘れていない？」



「何かって？」と夫は朝刊から眼を上げずにとぼける。

「いいわよ、何でもない」と妻は怒ったように言い、「今夜は何にする？」と続けてきた。

「本格的フランス料理」と彼がすまして答えた。

「そんなもの誰が作るの？」妻はむっとする。

「僕が作る」

そこで彼はおもむろに胸のポケットからカードを取り出して、妻の前にそっと置く。

『結婚記念日のメニュー』と書かれているカードを彼女は読み上げる。

「前菜Ⅱアスピック・ド・クルヴェットとキッシュ・ソーモン・オーエピナール。

それにサラダ・ド・ソージャですって？ 記念日忘れていなかったのね？」

妻の表情がすっかり晴れ上がっている。

「でもこんなメニュー、あなたに作れるわけがないわ」

「おまかせ願いたいね」と彼は自信たっぷりに答えた。

妻は全然信じなかった。何しろ、彼はキッチンに入ったこともない男なのだった。

しかしその夜、白いテーブルクロスを張った二人の食卓には、美しい小エビのゼリー寄せと、彩りも美しい鮭さけとほうれん草のキッシュ、仔羊肉こひつじと野菜のシチューがたっぷりかかった珍しい中近東料理のクス・クス、それにオリエンタルサラダなどが所せましと並んだ。

彼はクス・クスを温めている間に、冷えたシャンパンのコルクを抜いた。キャンドルの炎が揺らめく。

慌あわててドレスに着替えてきた妻が眼を見張る。

「まるで手品じゃないの。さあ、種明かししてちょうだい」

「種は明かさないよ」と夫は笑った。

とっておきの秘密兵器。とびきりの切り札。

「乾杯」二人はグラスを合わせた。

二人の結婚に、ともかくも乾杯。そして、と彼は胸の中でつぶやく。

『フォション』に乾杯。

フォション



グルメ王国として揺るぎない地位を占めるフランスでも、最も繊細かつドラマティックな食の世界を得意とする「フォション」。1886年創業、パリ、マドレーヌ広場の一角をしめる高級食料品店として名高い。フランス国内はもとより世界中にその名は知られ、いまやフランスの味覚の源と言われている。北から南から旬^{しゆん}の素材を厳選^{そう}して揃え、最高級の技術で第一級の味をつくり出す。アップル、ローズ、カシス、フランボワーズ、香り豊かなアロマティーがフォションの味の宇宙の入口です。果物と紅茶、このふたつの香りの出会いがフォションならではの世界を創りました。

ティーブレイクに欠かせないパティスリー（菓子）やケーキも、自慢のひとつ。美的感覚に彩られた見事な美しさが、パリジェンヌを魅了し続けている。また、いかにもフランスらしさを漂わせるのが、デザートフルーツのシロップ漬け。ロヌ川流域のアプリコット、ロワール特産の洋なし、フランス東部の西洋すももと、厳選された旬のフルーツを丁寧にシロップで煮たもので、その鮮やかな美しい色合いは目も楽しませてくれる。その他、エスカルゴやスープ、肉類などの瓶・缶詰も多種多様。しかし何といっても、フォションを代表するのはその惣菜類^{そうざい}だろう。オードブル、キッシュ、テリーヌ、カナッペなど、特別の日を楽しむにふさわしいデリカが並ぶ。フォションが選んだアルマニヤックやカルバドス・フルーツリキュール、そしてワインが最高の友となる。

秋風に乾杯

「田舎^{いなか}へ行こうよ」

と彼が言った。

「田舎なんてないじゃないの、私たち」

彼女も彼も都会生まれの都会育ちなのだ。

「僕が言うのはね、どこか風の吹くところ。」

湖があつて、できれば背景に山が欲しい」

「そんなところへ何しに行くの？」

「何かしなくちゃいけないのかい？」

彼はすくい上げるように彼女を見る。

「そうね、たまにはのんびりするの也需要ね」



彼女は彼の心を察して優しく同意する。

「お弁当作るわ」

「僕が言い出したんだ。今回は僕が作るよ」

「あなたが？」彼女は半信半疑だ。「一体何を作るつもり？」

「男のサンドイッチ」

「男ってのがつかなくちゃいけないの？」

と彼女が笑う。

「そう。男ってのがつくサンドイッチ」

彼は自信ありげに、謎めいてニヤリと笑い返した。

秋日和の休日、二人は小さなオープンカーにピクニック用のバスケットを積みこんで

田舎へ出かけて行った。

田舎には、彼が望んだとおり湖があり、その背景に山並みが幾重にも浮かび上がっていた。湖を渡ってくる風が、樹木や枯れ葉の秋の匂いを運んでくる。

空気はよく冷えた極上のシャブリの味がした。二人は湖のほとりで、二人だけの小さなパーティーを始める。

「これが男のサンドイッチなるものね？」

ポワラーヌの田舎パンにクリームチーズとスモークしたサーモンをたっぷりとはさんだものを取りだして、彼女が微笑した。

もう一種類にはフォアグラのパテとトリュフの薄切りがはさんである。彼がジュヴレ・シャンベルタンのコルクを抜いて、グラスに注ぐ。彼女はトリュフの方のサンドイッチにまずかぶりつく。

「どう？」と彼女が訊ねた。

「自然の味がするわ。トリュフは、秋の風みたいな味」

「じゃ、成功だ」

そう言って彼はワインを口に含み、厚切りのサンドイッチに手を伸ばした。少し荒けずりで素朴で、サンドイッチと彼はよく似ていた。